

# 苗場山麓 ジオパーク

Vol.  
31

## 振興協議会だより

〔発行日〕平成30年6月27日  
〔発行〕苗場山麓ジオパーク推進室  
〔お問い合わせ〕025-765-1600



### 総会が開催されました！



去る、6月5日に栄村役場内において、平成30年度総会が開催され、平成29年度の活動報告と決算監査報告が行われました。さらに平成30年度の活動計画と予算を審議頂き、計画どおりに進めるよう満場の拍手を頂きました。

認定から3年が経過して各部会が自主的に活動を進められてきていることが、その力強い発言と計画内容から伝わりました。

資源探査部会は、中津川左岸のトレッキングコース開設計画を進め、この秋季までに百合窪から石坂の御堂までの刈り払いを完了し、秋には探訪ツアーを企画するとの計画が報告されました。また、信濃川左岸域に点在する「飯山線駅舎と温泉」のセットと信越トレイルから分岐する中魚沼丘陵線と連結する山稜頂上を連結した整備構想は、そのエリアのポテンシャルの高さを伝えてくれました。同様に、栄村小滝周辺を「中世の山里」として評価して整備する考えも披露されました。

商品開発部会は、ジオ商品開発を目標に進めてきており、その商品のライセンス認定を念頭に置いた「苗場山麓ジオパーク認定商品制度実施要綱（案）」が提示され、今後事務局内部において慎重に前向きな協議を行うこととなりました。

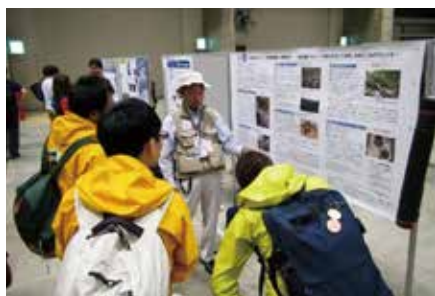
広報部会では、開催した写真コンテストの報告を頂き、そのクオリティの高さに会場がどよめきました。事務局では、栄村と津南町で優秀作品展示の準備を進め、さらにカレンダー製作ができないかを検討し始めました。

ガイド部会からは、ガイド養成講座や研修旅行などへの積極的な活動が報告されました。また、総人口1万人前後の町・村における活動参加人数の推移をグラフ提示し、「分かりやすい見える化」報告を頂き、会場全体が感心していました。部会から、ガイドみんなで羽織るジャンパー製作の要望が出され、現行予算内のやりくりで現実化するべき努力を払うよう会長から指示がありました。

事務局からは、再審査が10月31日から11月2日に決まり、3人の審査員が決定された旨の報告がありました。逆算すれば、あと5ヶ月でやり抜くことの「選択と優先」を具体的に手際よく進めることを確認して閉会しました。



## 地球惑星科学連合大会 ～ポスターセッション、JGN運営会議より～



大会での日本ジオパークのセッションテーマは、「ジオパークがつなぐ地球科学と社会－10年の成果と課題－」、私たちのポスターのテーマは「苗場山麓ジオパークの宝ものをどう活用し未来に伝えていくか」です。持続可能な社会を実現するためには、児童生徒へのジオパークに関する教育が鍵であること、時間がかかっても最重要との考えを紹介しました。

ここ2年間に係る児童生徒の実践を6点紹介しました。内訳は、低学年(石を素材にジオ学習の導入)、中学年(防災教育に関する体験とジオサイト巡り)、そして、小学校高学年(津南小・栄小合同)による合同学習などを紹介し

ました。中でも、苗場山麓ジオパークPRソング「Takaramono」の発表の記事について、多くの人の目を引いていました。

その他、JGN運営会議に参加し2つ気づいたことを記します。

- ①日本ジオパークが本格的に始動して10年になります。これまでに、教育、ガイド、保全など多くのワーキンググループが登場し諸課題の解決に向けて活動を進めていることに驚きました。
- ②今年度日本ジオパークを目指す、土佐清水及び萩の発表を拝聴してみて、認定時の課題を共有し、協議会内で発表内容を統一するなど、再審査に向け万全の準備が必要だと感じました。



## ジオパーク新任者研修会



ジオパーク新任者研修会が5月18日、東京都千代田区麹町にある弘済会館で行われました。全国から50名ほど、苗場山麓ジオパークからは2名が参加しました。

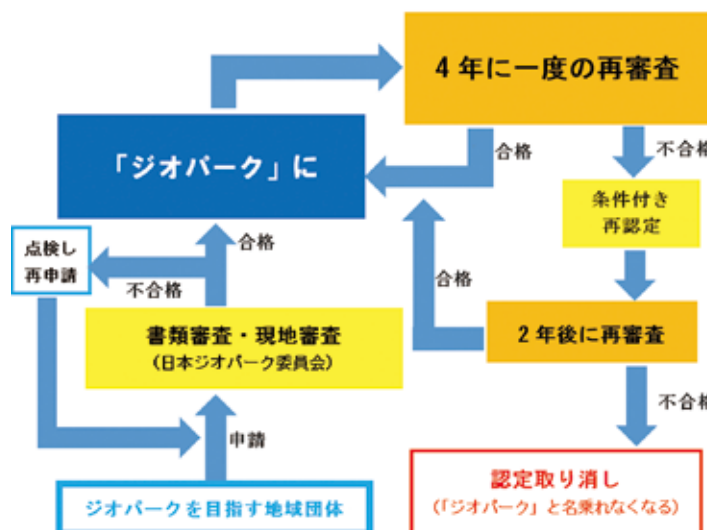
プログラムは、産業技術総合研究所地質調査総合センターの渡辺真人氏による「ジオパークの理念と活動の歴史」、伊豆半島ジオパーク推進協議会の新名阿津子氏による「ジオパークにおける経済活動」、金沢大学地域政策研究センターの菊池直樹氏による「環境活動の見える化」、日本ジオパークの目代邦康氏による「地質遺産の保護・保全の方法」の題目による講演でした。

渡辺氏からは、ユネスコ世界ジオパークの始まりの理念、地質遺産の保全と活用による持続可能な地域社会の形成について、新名氏からは、住民が地元遺産の価値を理解し、協力することが不可欠であること、数字より質を高める努力をすること、菊池氏からはコウノトリの野生復帰を例に挙げ、地域社会に定住する研究者(ジオパーク専門員)がいて、専門知識を提供しながら住民と一緒に汗を流すことの大切さ、目代氏からは、地域遺産の保全・教育・持続可能な開発を地域一体となっていくことが大事、等の内容で話していただきました。

改めてジオパークの持続には地域住民の理解と協力が不可欠であると感じた研修会でした。



## 再審査ってなあに？ジオパークの仕組み



今年は4年に1度の再審査の年です。日本ジオパークネットワークでは初めの審査でジオパークに認定を受けた後、4年ごとに再審査があります。再審査では、その結果で「再認定」と「条件付き再認定」があり、再認定ならまた4年後、条件付きなら2年後にさらなる再審査となります。条件付き再認定での再審査で不合格となると、ジオパークの認定が取り消されてしまいます。

2014年以降、ジオパークの審査では「ジオパークを目指す地域は、持続可能な地域社会の実現のために、ジオパークとして、その地域にあったやり方で住民、行政、研究者などの関係者が、ともに考え続けているか。また、そのために、これまでのやり方を変える覚悟があるか」というところを主にみられてきました。もちろん苗場山麓でもそれを踏まえた上での再審査となります。再認定となるよう、地域を盛り上げていきましょう！

認定ジオガイド  
が伝える

# ここが好きだよジオパーク

認定ジオガイドがおすすめの場所、もの、ことなどを紹介していきます。

## 「水の天国」 苗場山麓（ガイド No.1 小島隆夫）



私のお薦めする、苗場山麓ジオパークの見どころを紹介します。

ガイドとして、数多くのジオ・エコ・カルチャーサイトをお客様に御案内しています。どこのサイトの景観も、お客様は素晴らしいと感激してくれます。特に、ただ見るだけでなく、説明を聞きながらみる景観は意味が分かり、一段と美しく見えるらしく、説明を聞いて良かったと、お褒めの言葉を頂く事が多くなりました。これも、ガイドとしての力量が年々アップしている証拠かなと、一人感じている所でもあります。

お客様の案内は、季節や天候、ルート、時間、日、等々に制約があり、一年で一番良い条件での御案内が出来ず残念です。そのような時は写真を持参し、「本当はこのような景観になりますよ。次に訪れる際は情報を問合せ、条件の良い時に訪れてはいかがでしょうか」と、ご紹介するようにしています。



私自身は、苗場山麓ジオパークエリアを、時間を見つけて春夏秋冬、午前、午後と意識し観察に出掛けるように心がけています。場所によっては朝日・夕日が射しこむ時間帯、春先だけ出没する滝、高山の初雪と里の紅葉など、なかなかお客様が見る機会の少ない景観を見られたり、なかなか出合えない動植物に出会えたりします。特に、妙放牧場を經由し秋山郷に抜ける道路の紅葉は素晴らしいの一言です。多種多様の樹種が多く、上空のスカイブルーと樹木の紅葉が一体となり、まさに錦絵のごとくです。

道路を登り切り下りに差し掛かると、見倉、大赤沢、小赤沢、屋敷集落の紅葉や国道405号の行楽を楽しむ車列、そして苗場山が眼前に飛び込みます。

また、私が一番自慢したい苗場山麓のお宝は「水」です。

水の起源は、太古の時代(38億5000万年前)に何万もの天体が地球や近隣の天体に衝突して出来たとする説があるそうです。地球に衝突した彗星や小惑星によって水がもたらされたと言われていますが、まだまだ解明されていません。この豪雪地に、縄文時代から現代まで、延々と人が定住し続けているのは、豊富な湧き水がある事も理由の一つではないかと思います。沖の原の国指定史跡の近くには浅い沢があり、水が湧き出ています。私が子供の頃、まだ苗場山麓開拓事業前ですが、史跡の近くに畑があり、親からあそこには飲める水が出るから汲みに行ってくれと言われていたものです。沖の原台地には川はありませんが、あのような大きな史跡が存在し、今でも多くの世帯が生活しているという事は、昔から途切れる事なく湧き出る豊富な水があるからこそでしょう。

苗場山麓には、春の雪下人参から始まり、アスパラ、トウモロコシ、カサブランカ、キャベツ等々や、お米、お酒など、1年を通し、美味しい物や美しい花があります。これらのすべてが雪溶け水や湧き水が育んだものではないでしょうか。この地域はまさに「水の天国」でもあり、お客様に一番自慢できるお宝であると思います。





## 苗場山麓植物民俗辞典 刊行しました

ジオパーク推進室の活動として雄大な苗場山麓の自然環境を取り上げ、自然と人間との関係性をテーマとする『苗場山麓植物民俗辞典』を4年の歳月をかけ、平成30年3月に刊行しました。

執筆者の中沢英正さんは、新潟県自然環境保護員であり、苗場山麓の自然環境研究の第一人者です。苗場山麓は遙か縄文時代の遺跡が時期を異なり数多く分布する実態があります。約1万年間、森と共鳴・共生した縄文人は、自然界を資源と捉え、知恵と技術を巧みに組み合わせ資源化し、加工して製品化しました。その過酷な自然環境下で生きる知恵と技術は、近代民俗の世界にも間接的に継承されていると考えられます。

皆様のご理解とご協力を得て、縄文時代から残された雄大な自然環境と生きる知恵を、この一冊をバイブルとし22世紀の未来まで残したいと考えています。

### 執筆者より

#### ○苦労したところ

聞き取り調査で植物名が方言で話されたことです。実物と照らし合わせれば解決するのですが、雪に閉ざされた冬の調査では確かめることが出来ませんでした。また季節ごとの植物の姿を正確にとらえることにも苦労しました。植物の写真は出来るだけ新しいものを使いたいと思い、以前撮影した場所を訪ねてみましたが、環境がすっかり変わり消滅してしまったものが多くありました。

#### ○おすすめポイント

樹木と植物の利用方法や採取時期等が詳しく載っているところです。ものづくりに携わる方は作り方が載っているので伝承していったほうがいいです。

#### ○さいごに

自然の恵を利用することは、自然の事を知り、大切に作る心に繋がっていくものだと思います。この本が自然を見つめ、付き合うきっかけになってもらえれば嬉しいです。



## 突撃しよう！となりのジオ便り～佐渡ジオパークからこんにちは～



今号より全国津々浦々のジオパークの紹介をしていきます。現地に突撃をして苗場山麓との相違点を探してみましよう！第1回目は新潟圏域であり、苗場山麓から半日程度で行ける佐渡ジオパークです。

苗場山麓から車で1時間半程度、新潟県上越市の直江津港から佐渡島の小木港にフェリーが出ています。

全域が佐渡ジオパークとなっている佐渡島は、新潟県西部に位置しており、島の北北東・南南西方向に大佐渡山地と小佐渡丘陵が並び、その間には国中平野が広がっています。

佐渡島が陸化したのはおよそ300万年前。その後も隆起は続き、1000mを越える山地と丘陵を形作りました。また、さらにさかのぼりおよそ3000万年から1700万年前、この地域では多くの火山活動が起きていました。それは佐渡を代表する「金銀」の鉱床を形作るもとともなっています。

苗場からの玄関口になる小木半島には、多くの横井戸（山の斜面にトンネルを掘るようにして作られた井戸）が掘られています。小木は江戸時代まで、日本海側を廻る商船である「回船（かいせん）」の港として栄えていましたが、明治に入り、鉄道や蒸気船、電信などの発達により、回船業は衰退してしまい、農業へ転向していくこととなりました。しかし、大きな河川はなく、水田の水の確保が難しい状態でした。そこで掘られたのが横井戸です。この地域に分布する岩石は大昔の海底火山から噴き出した岩のカケラなどが降り積もったもので出来ています。そのため比較的柔らかく、人の手で掘ることが可能でした。また、落盤も少ないという特徴も持っていたため、横井戸が作りやすかったのです。小木で生活が続けるために大昔の海底火山活動の遺産が活用された事例ですね。また、家の建築や塩田などにも、海岸の岩がうまく利用されており、自然を恵みに変えてきた様子が伺えます。



横井戸

佐渡には他にも3億年前の化石が見られたり、トキを育む里山があったりと、見どころは様々です！ぜひ佐渡に突撃し、恵みの大地や自然の観察だけでなく、佐渡の人々がその恵みとどのように関わってきたか、感じてください。